

## さらなる勧め

### コロサイ人への手紙 4章2-6節（新改訳）

4:2 たゆみなく祈りなさい。感謝をもって祈りつつ、目を覚ましていなさい。4:3 同時に、私たちのためにも祈ってください。神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように祈ってください。この奥義のために、私は牢につながれています。4:4 また、私がこの奥義を、語るべき語り方で明らかに示すことができるように、祈ってください。4:5 外部の人たちに対しては、機会を十分に活かし、知恵をもって行動しなさい。4:6 あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい。そうすれば、一人ひとりにどのように答えたらよいか分かります。

「さようなら」を言うのは簡単ではありません。文化によって方法は異なりますが、別れを告げるのはいつも辛いものです。日本の文化とジョージア州の文化で似ていることの一つが、何度もお別れを言って、それでもなお、話し続けることです。誰も自分から最初に立ち去りたくはないようです。もちろん、いつもそうだというわけではありませんが、大切な友人と話をしているときは、たいていそうなります。

コロサイ人への手紙の中で、使徒パウロは別れを告げるのに苦労しているように見えます。コロサイ教会への手紙は比較的短いのですが、彼は多くの分野を網羅しています。しかし、手紙の初めから、一つのことがはっきりしています。使徒パウロはコロサイの教会のクリスチャンたちが成熟した信徒に成長することを望んでいます。彼は、被造物と教会に対するイエスの絶対的な主権を彼らに示しました。クリスチャンがキリストのうちにおり、キリストが彼らのうちにおられることを示したのです。

使徒パウロは、クリスチャン生活には、これからもチャレンジがあることを教えました。そして、間違った教えを取り入れようとする誘惑に抵抗する方法を示し、さらに、これまで述べてきたことを日常生活に生かす方法について、具体的な指示を与えました。コロサイ人への手紙のこの最後の箇所で、使徒パウロは教会にさらに4つの教えを与えています。これらの教えは、教会の中で成熟したクリスチャンを育成するためのものです。私たちがキリストについて、教会について、クリスチャン生活について学んだことをすべて具体的に実行に移そうとするとき、これらの教えを実践してみようではありませんか。これらのことは、私たちが健全な霊的生活、言い換えれば、生き生きとした霊的生活へと導いてくれるものです。

使徒パウロが与える最初の命令は、「たゆみなく祈りなさい。感謝をもって祈りつつ、目を覚ましていなさい。」です。パウロは別の箇所で、クリスチャンは「絶えず祈りなさい」（1テサロニケ5：17）と述べています。クリスチャンが祈り続けることは非常に重要な事柄のように思われますが、それはなぜでしょうか。私たちは皆、神が初めから終わりまで知ってお

られ、神の御心が成し遂げられると信じています。それなのに、なぜ祈ることがそんなに重要なことなのでしょう。ましてや、絶え間なく祈り続けることなどできるのでしょうか。祈りについての細かい話を省略しますが、祈りについて幾つかのことが言えると思います。

第一に、祈りとは私たちが主を強く求めていることを表すものです。詩篇の作者たちが私たちに示した基準は、神の民が神の助けを必要とするとき、神を呼び求めるというだけでよいということです。ですから、たとえすべてが神の思い通りになったとしても、私たちは神の助けを本当に必要としているので、私たちの祈りは重要なのです。祈りとは、その必要性の表現なのです。

次に、祈りとは、神にいろいろなことをお願いする以上のものだということです。もちろん、祈りというのは、私たちが自分の必要を神様に示し、神様がその必要を満たしてくださるようお願いすることでもあります。聖書には、そのような祈りの例がたくさんあります。しかし、祈りとは、私たちの必要を満たしていただく以上のものです。

祈りは多くの場合、私たちの人生における神様の御業を振り返る時です。使徒パウロは2節で、私たちは「感謝」を持って祈るべきであると言っています。一つ確かなことは、自分の必要を神に嘆願することは正当な祈りの一種ですが、それは寂しく、多くの場合、必死な祈りであることです。この願いを聞いてください、あの願いを聞いてくださいというばかりでは、「たゆみなく」祈り続けることはできないでしょう。一方、自分のために神がなさった偉大な御業や、神が他の人々の人生になさったことを思い起こせば、あなたの祈りは新しい境地へと引き上げられるでしょう。

祈りについても一つ言えることは、祈りは自然に賛美へと流れていくということです。祈りの最大の目的は、賛美の内に神を呼び求めることでしょう。神への賛美を歌うことと、祈りの中で神を賛美することには、さほど違いはありません。私たちの多くの賛美の歌は祈りです。祈りのもう一つの神にふさわしい使い方は、告白の祈りです。私たちは三位一体の神に、私たちの主キリスト・イエスの完全な義によって、憐れみと許しと回復を求めて祈ります。祈りについては、もっと多くのことが言えると思いますが、コロサイ人への手紙4:2にあるパウロの命令には、もう二つの要素があり、私はそれに注目していただきたいと思います。

まず、教会は堅く祈り続けなさいということです。この「堅く続ける」という言葉は、頑強に、あるいは維持することを意味します。日本語訳では、「たゆみなく」という否定形で表現されています。なぜ、教会はそこまでして祈りを続けなければならないのでしょうか。私としては、この答えがすべてではないと思いますが、基本的には、祈りとは聖霊によって神とつながるものなので、祈りに注意を払うようにとされているのです。私たちがすでに述べてきた祈りに関するすべてのことで、祈りは私たちと神とのつながりであると言ってきました。賛美にせよ、祈りにせよ、私たちは聖霊によって神とつながっているのです。

その意味で、使徒パウロは、私たちは目を覚まして絶え間なく祈り続けなければならないと述べています。私たちを取り巻く霊的な権力はまさに戦争状態にあるのです。私たちは、偽

りの教えや不敬虔から自分自身と教会を守るために働いているのです。私たちの敵は、血肉ではありません。霊的な敵です。ですから、私たちの武器は霊的な武器なのです。目を覚ました祈りとは、二つのことを同時に行う祈りです。第一に、神様が約束されたことをすべて覚えている祈りです。第二に、私たちの周りの世界で何が起きているかを把握している祈りです。必ずしも世の中の出来事について考えているわけではなく（コロサイの人々には世界の出来事を知るためのニュースやインターネットはありませんでした）、教会の霊的生活や成熟にとって重要な事柄について祈ることです。つまり、目を覚ました祈りとは、知恵と希望に満ちた祈りなのです。

使徒パウロの第二の教えは、第一の教えと密接に関わっています。パウロは「同時に、私たちのためにも祈ってください。神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように祈ってください。この奥義のために、私は牢につながられています。」と語っています。引き続き、祈りのテーマですが、今回は教会のための祈りではありません。神の御国の拡大のための祈りです。

使徒パウロはこの手紙を獄中から書いていますが、彼の目的は変わっていません。彼は、キリストを世界に知らせたいと願っています。自分が自由になれなくても、御言葉が自由になるように祈るようと 教会に呼びかけているのです。ここには深い信仰が表れていますが、同時に謙虚さもあります。コロサイの教会がパウロの釈放のために祈り始めたことを疑いませんが、彼の願いは鎖につながれていてもいなくても、キリストの奥義をはっきりと語りたということでした。御国の拡大を祈ることと霊的成長は直結しています。イエスを知り、信仰が深まっているクリスチャンは、他の人々にもイエスを知ってほしいと願うのです。たとえ自分が苦しんでいても、キリストの言葉をはっきりと宣べ伝えられるようにと願うパウロの姿は、キリストによって真に変えられた人生を映し出しています。コロサイの信徒たちの祈りは、神ご自身の御心を実現するための神の計画に役立つものですが、それは同時に、福音があらゆる場所ではっきりと宣べ伝えられる必要性を想起させるものでもあります。パウロは人々が自分のために祈ることを望んでいますが、パウロのために祈ることは、コロサイの人々が自分たちのためにこれらと同じことを祈るようになるための動機にもなるのです。

パウロは、自身の「語るべき語り方で」キリストの奥義を説き、明確に語りたいと言っています。このことは、私たちにとってもつねに悩ましいことだと思います。私たちも主について人々に伝えたいと思いつつ、イエスを信じることで何かトラブルに見舞われるのは避けたいと思うのです。キリストを宣べ伝えたことで現在獄中にあるパウロは、もっと明確に福音を語る事が自分の語るべき道であるとして、大胆さを求めているのです。私たちも、福音をはっきりと語るべきです。福音を語るための扉が開かれているとき、一般的な言葉や当たり障りのない表現を使わないでください。イエスについての真理を人々に伝えましょう。また、それを祈りの対象とすべきです。宣教師、牧師、教会の指導者などが、福音を大胆に語るができるように祈りましょう。それは、あなたが福音によって他の場所で多くの人々の間に変化が起こるのを見たい、と願うことから始まります。そして、他の人々のために祈った後、その願いがあなた自身の人生にも及んでいることに気づくでしょう。世界に働き手を送り出し、多くの人々が神の御子を信じるようになるように、主に祈りましょう。

使徒パウロの次の命令は、「外部の人たちに対しては、機会を十分に活かし、知恵をもって行動しなさい。」というものです。この節で「行動する」とは、私たちがどのように生活しているかということです。つまり、この節の意味は、ノンクリスチャンとの付き合い方や生き方に気をつけなさいということなのです。「機会を十分に活かし」とあるのは、人生には目的があり、クリスチャンでない人の前での生き方も同様であることを意味しています。パウロがコロサイの信徒に賢明に歩むように警告したとき、どのような状況を想定していたかは分かりませんが、その人の人格を示すようなことを想定していたのではないかと推測されます。それは、ビジネス取引、地域社会との関わり、他の人に対する態度などです。ご存知のように、自分の宗教を変えるということは簡単なことではありません。周りの人や知り合いは、クリスチャンになる前のあなたの言動を覚えているものです。だから、その人たちとの付き合い方、生き方をわきまなさいというのが、パウロの教えなのです。具体的に言うと、私は他のクリスチャンとの間にある不平不満をノンクリスチャンの人に言わないようにしています。クリスチャンがまだ罪に苦しんでいることをノンクリスチャンに話すことは、初めは大きな論争にならないように思われますが、他のクリスチャンに対する個人的な不満を話すことは、ノンクリスチャンが教会に来ることや福音を聞くことを拒む口実になりかねません。私たちは、仕事において真面目に忠実に働くように気をつけなければなりません。ただ、私たちは主のために働いているのであって、人のため（お金のため）ではないので、私たちの労働倫理にも注意が必要です。

また、クリスチャンはノンクリスチャンと同じような生き方をしてはなりません。周りの人に優しくない、親切でないなど、不快感を与えるようなこともしてはなりません。私たちは、最も誠実で信頼に足る従業員であるべきです。周りで困っている人がいたら、手を差し伸べる忠実な隣人であるべきです。そして、日々の生活が喜びにあふれていなければなりません。しかし、この知恵の呼びかけに留意してください。個々のクリスチャンが、この重荷を一人で背負うようにとされているわけではありません。教会という体の生活もまた、ここで賢く歩むように命じられているのです。教会は、個々のクリスチャンと同じように、この世において神にかなった関わりをするように命じられているのです。

未信者の前で賢く生きることのもう一つの点は、本当に大切なことのために時間を使うことです。パウロは、「機会を十分に活かし」と言っています。この言葉は、私たちがこの世で過ごす時のことを指していると考えてよいでしょう。この解釈には、使徒パウロはイエスの再臨が間近であることを示唆している、というニュアンスを加えることができる。では、残された機会を最大限に活用しましょう。それはどういう意味なのでしょう。少なくとも2通りの解釈ができます。私の知る誠実なクリスチャンは、「クリスチャンは非常に効率的な働き手であるべきだ」と言っています。しかし、私はこれを異なった価値観で生きて見えています。

機会を有効に使うということは、たくさんの仕事をこなすことよりも、神の命令に従うこと、天のものを優先させることと関係があるはず。つまり、人生設計をするときに、「生産的なこと」のために天からのものを軽んじてはいけないということです。たとえば、主日の

すべてをキリスト教の礼拝と休息にあてることは、生産性の観点からすると「もったいない」と思われるかもしれませんが、優先順位が違うだけなのです。例えば、主日のすべてをクリスチャンの礼拝と休息にあてることは、生産性の観点からは「もったいない」と思われるかもしれませんが、優先順位が違うだけなのです。神の民と一緒に礼拝をすることは、貴重な賜物です。もし、周りの人があなたのことを見て、「どうして一日を無駄にしているのだろう」と思っていたら、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによって生きる」ということを優しく教えてあげましょう。

私たちが生きている日々は誘惑に満ちていて、それらが悪であることを見抜かなければなりません。エペソ5:15-16に、私たちの世界についてまさにそのような記述があります。

### **エペソ5:15-16**

5:15 ですから、自分がどのように歩んでいるか、あなたがたは細かく注意を払いなさい。知恵のない者としてではなく、知恵のある者として、5:16 機会を十分に活かみなさい。悪い時代だからです。

私たちは、他の人々を真似た人生を歩んではいけないのです。快樂の追求は、私たちの世界を破滅させ、人々を惨めな気持ちにさせているのです。私が皆さんにお勧めするのは、自分自身を吟味することです。最近、あなたは何に時間を費やしていますか？もし誰かがあなたの生活を一週間見ていたら、あなたが時間を有効に使っているクリスチャンだとわかるでしょうか？

今日の聖書箇所でパウロが最後に述べているのは、「6節 あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい。そうすれば、一人ひとりにどのように答えたらよいか分かります。」ということです。あまり説明をしなくても、パウロが伝えたいことが分かると思います。塩と親切がどのような関係にあるのか、少し話を戻しますが、全体的な意味は明白です。自分の言葉で他人を傷つけるのではなく、周りの人に優しく恵みと赦しを勧めなさいということです。この聖句のもう一つの根本的な問題は、最後の部分にあります。パウロは「一人ひとりにどのように答えたらよいか分かります」と言っています。

パウロはコロサイの人々に、福音を大胆に伝えることができるように祈ってくれるように頼んでいますが、今度はコロサイの人々に、親切に、様々な方法で人々に答えるようにと語っているのです。少なくとも私は、「一人ひとりにどのように答えたらよいか分かります。」という言葉、そのように受け止めています。どうすれば、福音のメッセージを明確にしなから、一人一人に親切に、賢く答えることができるのでしょうか。この2つの考え方は、必ずしも同じことを示しているわけではないので、分けて考えることができます。福音を明確に伝えることと、親切に話をすることは同時にできます。それらは相反するものではありません。柔らかな答えは怒りを遠ざけることができますが、柔らかな答えが欺くことを意味するわけではありません。

この時点で、親切な言葉と塩味の関係が脳裏によみがえります。私たちは皆、味付けが不十分だったために美味しくなかった食べ物を食べたことがあると思います。味付けが薄い料理では箸が進まないでしょう。少しの塩があれば、不味い食事も美味しくなります。同じように、話し方も、ちょっとした優しさや謙虚さがあれば、批判も受け流すことができます。子供の薬も、飲みやすいように飴のように甘く作られています（それでも美味しいとは言えませんが）。大人の薬でも、飲みやすいようにジェルカプセルにしたものがあります。健康に良い薬は、その効能から感謝して受け取るべきものですが、味では飲むのをためらってしまうでしょう。しかし、ちょっとした工夫で、薬を飲めるようになり、その効能が体にもたらされるのです。私たちの言葉もこのようなものでなければなりません。私たちは、教会の中にも外にも、互いに癒し、平安、励まし、喜びをもたらすように努力しなければなりません。

親切な言葉についての注意事項：批判をするときは、本当に重要なことに焦点を当てるようにしましょう。もし私たちが個人的な好みで他の人を批判するならば、どんなに親切に話しても、自分の話に耳を傾ける人たちを失う可能性があります。また、自分の言葉が相手にどのように受け取られるかを考えるようにしましょう。相手の立場を考えないと、せっかくの言葉も無礼なものになってしまいます。その人がどれだけ努力して罪を克服してきたかは、聞いてみなければわかりませんし、何もしていないと決めつけると、傷ついたり罪悪感が増したりすることもあります。

親切な言葉、賢く生きること、世界中の主の働きのために祈ること、絶え間なく祈ることなど、主は私たちを霊的成熟へと導こうとしておられるのです。深い霊的な生活とは、キリストの御言葉に根ざし、キリストが座しておられる天のものを見据えていることです。パウロがコロサイ教会に対して持っていた願いは、OICに対して持っていた願いと同じものです。パウロは、この教会が教会の頭であり被造物の主である私たちの主イエスに服従することを望んでいるでしょう。この教会に、恵みの福音、すなわち、イエスの犠牲を通して与えられる神の驚くべき恵み、イエスを信じる信仰によって受けられる恵みを知ってほしいと願っているのです。この教会の人々が、天のものに目を向け、以前の生活の地上の罪深いものをすべて捨て去ることを望んでおられるのです。つまり、私たちは、いつの時代も教会とともに、主イエスを信じる信仰生活を送り、その信仰の中で成長するようにと呼びかけられているのです。

私がこの教会のために祈ることは、皆さんがキリストにある希望をしっかりと持ち続けることです。主のために生きることによって倦むことがないように。あなたがたが希望を持ち続け、一致して互いに繋がろうとするとき、コロサイ人への手紙4章2節～6節にあるパウロの教えに従いましょう。絶え間なく祈り、神の御国の拡大のために祈り、賢く生き、親切に語りましょう。